試験的RPG

あんにん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは剣と魔法と理不尽と序でに脱力感溢れる
異世界召喚勇者と転生者、そのパーティーの物語です。
小難しい内容じゃないので、肩の力を抜いてカップ麺でも食べながら
読んでください。
＊作者はとうふ様のツクール作品を応援しております

目次

剣と魔法と理不尽と序でに脱力感を感じさせるＲＰＧ ―――― 1
おいでませマッシロ王国 ―――― 6
キルゼムオール ―――― 15
ダンジョン付き一戸建てでこのお値段 22
いざ、新大陸へ ―――― 33
流されてダイダイ村 ―――― 41
クイズ☆知識の洞窟 ―――― 51
クイズ☆知識の洞窟？ ―――― 59

剣と魔法と理不尽と序でに脱力感を感じさせるＲＰＧ

試験的ＲＰＧ

「マンネリ化するチート転生者たち!!
今そこに終止符を打つ!!
進撃の時代ですよーっ!!」
俺の目の前で椅子に腰掛けた神様らしきおっさんは妙なことを口走りだした

「で、終止符はともかく
どう言う転生をするんだ?」
「ちょっと待ってろ……そえいゆっ!!」
「……何その掛け声」「ちょっと新世界創ってみた」
とんでもねぇことしやがった!?

「これからお前をその新世界に転生させる

安心しろ、剣と魔法と理不尽、ついでに脱力感の蔓延る世界だ」
「前二つはともかく理不尽と脱力感!?」
「俺が中学生の頃書き溜めてたチート能力を一つか二つ渡すから安心しろって」
「中学生って、神様にも義務教育とかあるんだな」
「俺みたいに人間から神様になった奴はそうだな、他は知らん
で、肝心のチート能力だが…
『影葬・影装』（ハイドアンドアナザー）
ザックリ言っちゃうと自分の触れた影を操る能力だ
「何それ、影絵位にしか使えねぇじゃねぇか」
「悪い、言い方が悪かったな
要は影を槍状に実体化させて的に突き刺したり
自分の分身を創り出したり出来たりする能力だ」
「まぁ普通はそういうふうに解釈するよな」
「なら何故疑ったし」
「死ぬ直前に主人公最弱系の小説を読んでてな
しかもマンネリ回避とか言ってるから疑わないほうがおかしい」
「そうか、疑り深いお前にはもう一つプレゼントしてやろう

『従魔・習魔』（クリーチャーズ）
ドラクエで言う魔物使い、魔物を仲間に出来る能力と
仲間にした魔物の技を覚えることができる能力だ」

「これも魔物がいないと意味なくね？」
「居るから安心しろ
正確には魔素って呼ばれる物質に取り込まれたものだけどな」
「魔物って何食べるんだ？」
「基本的に魔素を有する存在
さっき創った世界では魔素を結晶にしたものを通貨にしてるから
それを食べさせてやれば良い、他にも魔素の篭ったアイテムとか」
「つまり襲いかかってくる魔物は追い剥ぎみたいなものか」
「そうなるな、後は嗜好品的に元になった動物に
応じて普通の動物が食べる物も食べる」
「じゃあチートも決まったことで、ほかに質問は？」
「転生後の性別、容姿は？」
「そうだな、影だし闇繋がりで

某スクエア連載中災難系エロ漫画のヤミさんで良いだろ」
「あの人は変身能力じゃないか？」「こまけぇこたぁ気にすんな」
「てか俺男なんだけど？」
「神の前には性別すら関係ない、訳でもないけど
第二の人生なんだから違う性別を試してみろよ
幸いハーレム願望なんて無いだろ？」
「男色趣味も無い、まぁ一理あるか」
「じゃ、転生させるぞー
そうそう、このシステムも『新しい親との接し方が分からないって』
苦情が多かった少し弄ってみたんだ
好きな時代に好きな年齢でその世界に突然現れる事が出来るぜ」
「そーなのかー」「ルーミアの方が良かったか？」「ヤミさんで結構です」
「と言うかその世界でどんな事が起こるのか分からんからな
原作開始みたいな合図無いのか？」
「そうだな、急な創りだからありがちだけど
『魔界から魔王と愉快な仲間たちが攻めてきて世界各国が大ピンチ
その半年前にそうなる事を予知したある王国が異世界から勇者を召喚した

異世界から呼び出された勇者は仲間たちと魔王を倒す旅へ旅立つ
勇者は魔王を倒し元の世界へ帰れるのか…？』
物語のあらすじを付けるとしたらこんな感じだな」
「凄いありがちだな、俺がその異世界から来た勇者か？」
「いんや、お前はその世界に居た事になってる
勇者と愉快な仲間たちに関わるかはお前が決めれば良い」
「そうか、勇者が召喚される国の名前は？」
「これもさっき考えたからありがちだけど
平和の国マッシロ王国だ」「マッシロ王国!?」
「作者も考えるの面倒なんだよ
魔王の住む国なんて魔王の国マックロ王国だぞ？」「適当すぎないか!?」
「一々文句の多いやつだな
とっとと決めてくれよ」
「……じゃあ勇者召喚の２年前
ま、マッシロ王国？と同じ大陸の何処かに１４歳で送ってくれ」
「あいよー、じゃあ精々頑張ってくれー」
気の抜けた言葉のあと、おれの　めのまえが　まっくらになった

おいでませマッシロ王国

マッシロ王国マッシロ城広場
そこにミツイロ大陸を拠点とする沢山の冒険者が集まっていた
何といっても、今日この日に異世界から召喚された
勇者の仲間３人を決める審査が行われるからだ
何故大陸中の冒険者が集まったのかというと
冒険者としては勇者の仲間だったと言うのは泊が付き仕事の入りが多くなる
要するにみんな金目当てだ（一部、本当に平和を願っている人もいると思うけど）
「俺もその一人なんだけどね」「ニャーン」
俺の隣で体長約１ｍの子猫（絶句）が一声鳴く
最初は他の冒険者が絡んできたけど
こいつ呼び出した瞬間誰も声を掛けなくなったな
今までの２年間を全部説明するのはごめん被るが
取り敢えず影の能力をある程度使えるようになったし
魔物は１０体位仲間に出来た、現在コイツ以外は魔物牧場に預けてある

偶々6体目に仲間にした魔物がスキル『仲間を呼ぶ』を持っていたので
牧場からこっちに呼び出すのは一瞬でできる、戻すのは無理だけど
「おはよう冒険者の諸君!!」
上から声が聞こえる、白いヒゲに金色の冠をしているから多分王様だろう
「これから勇者殿の仲間となる3人を決める審査を始める!
最後の一人まで審査をしてから決めるので安心して一人づつ入ってきたまえ!」
最初の一人が入っていった、しかしアピールか…
一人辺り何分かかる計算なんだ?

3〜4時間後
喫茶店に行ってたらほぼ全て冒険者がアピールし終わったらしく
ようやく俺の順番が回ってきた
「ほう、次はお主か
まだうら若き少女のようだが…腕に自身があるのか?」
「扉を開けると行き成りむさいおっさんに話しかけられたんだけど
こういう時どういう顔すればいいのか分からない」
「……笑ったら怒られると思うよ?」

机で王様と一緒に座っている、懐かしい学生服を着た青年が答えた
あれが勇者か、パッと見少し顔の良いモブAにしか見えんな
「ご…ゴホン！先ずは実力の審査だ！
どんな手段でも良い！俺を倒して見せ「ラリホー」グーグー…スヤスヤ…」
「き、きたねぇ…」「汚いは褒め言葉だ」
「宜しい、次はアピールタイムじゃ！
君の魅力を余すところなく勇者殿にみせなさい」
「魅力を余すところなく…だと？」
「闇魔法が使える」「中二心をくすぐるチョイスだな」
「ニャーン」「そうだった、序でに職業は召喚士だ」
「キラーパンサー？」「魔物化した子猫だ」「ニャーン」
「闇魔法に魔物を従える魔法…そしてその金髪
ひょっとしてお主が七英雄の一人『黒のトリガー』か…？」
「クロノトリガー？」「黒は異名だ、そして人違いです」
「そ、そうか…アピールはもう終わったかの？
それでは最後に、お主が何故この審査に出向いたのか教えてくれ」
「いい加減別の大陸で冒険したかったからです

勇者一行なら護衛する代わりに船で移動できますからね」
「普通は出来ないの？」
「護衛で船に乗れる人間は限られてるから
私のように冒険者初めて半年の新米は信用されないんだ
勿論仲間になったからには魔王討伐に付き合うから安心しろ」
「あくまで冒険をする為か…宜しい
これで君の審査を終える、下がって良いぞ」
「では失礼します」

翌日、城下町の掲示板に勇者一行の名前が掲示されていた

勇者一行メンバー
・勇者　リョウ・シノザキ
・女騎士　アスラ・ミッドガルズ
・女魔法戦士　ルーシェ・アフガレド
・女召喚士　ルイ・サイファー

一番最後のやつ…一体何シファーなんだ…まぁ俺なんだけどさ
この世界では貴族でもない限り、性には生まれ育った故郷の名前が入れられる
上の二人はミッドガルズとアフガレドで育ったんだろう
魔神剣とベギラマを使うんですね分かります
しかし勇者以外パーティー全員女ってのには作為を感じるな
まぁ今まで一般人だった勇者に女とは言え
屈強な冒険者をどうこうできるとは思えんが

俺は再度城内へ赴く、謁見の間で勇者一行を集めるのだそうだ
「ん?お嬢ちゃんひょっとして迷子か?」
赤髪で長身の女が話しかけてきた、実際迷子みたいなもんだし聞いてみるか
「謁見の間という場所が何処か聞きたいのですが・・・」
「おお、それなら私と同じだね
あたしはアスラ・ミッドガルズ!通りすがりの迷子さ」
「あ、どうも俺はルイ・サイファーですって
あんたも人のこと言えないじゃないか!?」
迷子の騎士、アスラ・ミッドガルズが仲間に加わった

「いやー参ったね、この城広すぎっ」「やれやれだ・・・」

約３０分くらい、現在マッシロ城の多分三階
謁見の間は一向に見当たらない
目の前には赤い宝箱が置いてある
「・・・この部屋もハズレか・・・さっさと行こう」
「おいおい、目の前に宝箱があるのに開けないのかい？」
「何言ってるんだ、城の中の宝箱なんて開けたら
牢屋行きに決まってるだろ？」
「開けてみるだけだって、それに勇者一行なんだから
そんなに価値のないものなら貰ってても大丈夫さ」ガチャッ

バターン!!　宝箱の中から昨日の鎧を着たおっさんが出てきた
「うがー！俺の眠りを妨げるものは死あるのみだ!!」
「「そんな所で寝てるの!?」」
「あっ!!お前は昨日のちびっ子！

昨日はよくも卑怯な方法をとってくれたな！」
「卑怯な方法って？」「睡眠魔法で眠らせた」
「あぁっ！その手があったか!!」「ラリホー」
ブゥン!!　しかしラリホーはおっさんには効かなかった!!
「ふはははは!!今度は睡眠魔法は効かんぞ！」
「眠り耐性の篭った装飾品を付けてるのか」
「成程『ニア殺してでも奪い取る』だね!?」
「勇者の仲間が追い剥ぎとは恥をｓ「マヌーサ」ぬわっふ!?視界が霞む!!」
「占めた!!くらえ必殺・兜割り!!」
アスラは自分の兜をおっさんの顔面に叩きつけた
おっさんは状態異常『鼻血』になった!!
おっさんは鼻血を出している!!おっさんの体力が半分になった!!!
「止めだ!!オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァ!!!!!」
ルイは影の拳でおっさんの顔面をしこたま殴った!!
おっさんに合計９９９のダメージ!!おっさんを倒した!!
経験値０を獲得、１０Ｇを手に入れた!!
おっさんからフリスクを剥ぎ取った!!

レベルスターを獲得!!ルイ達のレベルが上がった!!
「おっさんは犠牲となったのだ・・・フリスク（ブラックミント味）の犠牲にな・・・」
「所で読者の皆はレベルスターシステム知らないんじゃないか?」
レベルスターと言うのはこの世界において生物のレベルを上げる経験値の結晶で
1レベル上がる度個人差はありますが強くなります
主に強力な力を持つものや存在感の強い敵なんかを倒すと現れる不思議物質です
「中にはレベルが一定以上無いと使えない技とかもあるからな」
「さっきの兜割りみたいにネタとして一時的に使えることはあるけどね」

「ぐ・・・ぐぅ・・・良くぞ私を倒した・・・
だが心して聞け!!私を倒しても第二第三の私が貴様らの前に立ちはだかるぞ!!」
「えーっと・・・つまりどういう事だい?」
「つまりこれから先ずっとダンジョンや城で
落ちてる宝箱を調べると必ずこのおっさんとのバトルになるって事だ」
「成程!つまりレベルスターもらい放題なんだね!!」
「えっ、いや私にも仕事があるからそこまでは・・・」
「「男が一度口にした事を濁すんじゃねぇ!!（ＣＶ若本）」」

おっさんは二人の熱い一言に酷く感銘を受けた!!
「ちょっと辞表出してくる!!」ダダダダダ!!
「悪は去った!!」「まだ〇ライム一匹倒してないのに何て一言を・・・」
こうしておっさんを世界中の宝箱に封じ込める事に成功したルイ一行は
再び謁見の間を探す事になった・・・・・・・・

キルゼムオール

マッシロ城三階にて勇者と王様が待っているであろう謁見の間を探すルイ・サイファーとアスラ・ミッドガルズの一行

二人は未だ謁見の間を見つけることができないで居た―

「お腹すいた」ぐー「我慢しなさい」ぐー「・・・・・・」

「仕方ない・・・厨房に当たるまで『もやし』で食いつなごう」

「なんでそんな嵩張りそうな物を・・・」モシャモシャ　ポロポロ

「文句言いながら食ってるじゃないか」モシャモシャ　ポロポロ

「「「「そこまでよっ!!」」」」

「「誰だ貴様ら!?」」

「右手にバケツ!!」「左手にモップ!!」「背中で語るはご奉仕道!!」

「この世に汚れがある限り!!」
「磨いて見せよう清掃の鬼!!」

「「「「家政婦戦隊!!メイドファイブ!!」」」」

「家政婦戦隊!?」
「我らがご奉仕するマッシロ城を!!」「もやしで汚す愚か者!!」
「断じて許せん!!」「死ぬか!!」「消えるか!!」
「「「「微塵に砕けろ!!」」」」
「メイドファイブ・・・聞いたことがある
　マッシロ王国が遥か昔、それこそ魔物が誕生するもっと昔の話だ
　マッシロ王国に攻め入った大国・・・その名もメイサイ帝国
　オーバーテクノロジーとさえ言われた魔導兵器を操るかの帝国に
　マッシロ王国は戦場となるまで追い込まれていた・・・」
「長いから結果だけ教えてくれない?」
「帝国軍がメイドファイブに全滅させられましたとさ、めでたしめでたし」

「だと思ったよ」

「あやつらか・・・懐かしい敵だ」
「ポップコーンさえ食べ歩かなければ生きて帰れたものを」
「映画上映でもしてたの？」
「過去の話はおしまいにしよう」「ここから先は未来の話だ」
「さぁ!!愚か者共!!マッシロの土へ還るが良い!!」

メイドレッドが現れた!!
メイドブルーが現れた!!
メイドイエローが現れた!!
メイドピンクが現れた!!
メイドグリーンが現れた!!
「所で気になったんだけど以イサイ帝国が滅んだのって３０年以上前だよな？」
「「「「!!?　生かして返さん!!!!」」」」「逆鱗に触れてどうする・・・」

「メイドスプラッシュ!!」
メイドブルーはバケツをルイたちに向けてほおり投げた!!
ザパァーン!!ルイたちは水属性のダメージを受けた!!
「ガードしますよっと」グニャン「うわっぷ!?」
ルイは影を傘状にして水を防いだ!!アスラはモロに喰らってしまった!!
アスラはバケツが頭に嵌ってしまった!!

「メイドカラミティ!!」
メイドグリーンははたきで旋風を起こした!!
ビュオォォォォォォォォ!!ルイたちは風属性のダメージを受けた!!
「てりゃぁ!!」「ぬわー!?」「グッホォ!!や、やるじゃない!!」
ルイは影で旋風ごとメイドグリーンを殴り飛ばした!!
アスラはバケツで前が見えない!!よろめいてしまった!!

「メイドサンダーボルト!!」
メイドイエローはセーターをこすり合わせて雷を呼び寄せた!!
ピシャッ!!ゴロゴロゴロ!!!!ルイたちは雷属性のダメージを受けた!!

「ぬがっ!?」ビリビリビリ!!「あｂｂｂｂｂｂ!!」バチバチバチ!!
ルイは怯んでしまった!!アスラは水を被っていて感電してしまった!!

「メイドヒール!!」
メイドピンクはルイたちに回復魔法を放った!!
ルイたちは完全回復した!!アスラはバケツとよろめき、感電が治った!!
「「「死ぬがよい!!」」」「あべしっ」
メイドブルー、グリーン、イエロー、レッドはピンクを制裁した!!
メイドピンクは倒れた!!

「数の暴力反対!!」「私たちもさっきおっさん相手にやったじゃないか・・・」
「は、腹減った・・・」ヨロヨロ　ぐー・・・
「どうしたんだ?」「厨房・・・あと謁見の間は何処ですかぁ・・・?」
「もやしで食いつなぐんだ!!」「モグモグ!!　ゴックン」ポロポロ

「プハァー、助かりましたお嬢さん!!

僕はルーシェ・アフガレドと言うものです

助かりついでに謁見の間の場所を「「「許さん!!」」」・・・え?」

「またこの城を汚すものが現れたか!!」

「丁度いい!!」「纏めて葬り去ってくれる!!」

「――――」

「・・・・・・ピンク?早くしてくれ

『このマッシロの土へ』だぞ?」

「――――」「お、おいピンク!?」「どうしたんだ!!」

「し、死んでる・・・!?」

「ぴ、ピンクゥゥゥゥゥゥウウウウウウウ!!!!!!!」

「よ、よくもピンクをやりやがったな!!」
「不意打ちとは卑怯なり!!」「貴様それでも騎士の端くれか!?」
「お前らがさっき制裁したんだろうが!?」
「おのれ!!」「ピンクの弔い合戦だ!!」
「生きて!!」「帰れると!!」「「「思うなよ!!」」」

「ぐっ・・・面倒なことになってきたな」
「シェーラって言ったけ?もやしの分働いてくれよ!!」
「もやしひと袋の恩で命のやり取りを強いられるとは・・・
ですが向こうに引く気は無いようですね!!
リリカルトカレフキルゼムオール!!
魔法戦士リリカルシェーラ!!始まります!!」

迷子の魔法戦士シェーラが仲間に加わった!!

ダンジョン付き一戸建てでこのお値段

「前回のあらすじ、リリカルマジカル」
「あなたは一体何を言ってるんですか？」「てめぇ・・・」
「まぁまぁ、今は戦闘中でしょ？」「後で覚えてろよ・・・」
「さて！この中では僕が一番素早いみたいですね!!
　喰らいやがれぇっ　　邪ッッ!!　」

　シェーラはかかと落としを放った!!
　メイドブルーに物理属性のダメージ!!
　メイドブルーは気絶した!!

「行くよルイ!!」「集団戦闘の基本は!!」「「各個撃破!!」」

ルイとアスラは近くにあった鈍器でメイドブルーをタコ殴りにした!!
メイドブルーに物理属性のダメージ!!
メイドブルーを倒した!!
「ブルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ!!?」
「おのれ!!ピンクに続いてブルーまでも!!
グリーン!!イエロー!!合体技でいくわよ!!」
「ガッテン承知!!」「喰らえ必殺奥義!!」
「「メイドインフェルノ!!」」
メイドレッド、グリーン、イエローは
はたき、セーター、ガスコンロを使って煉獄の炎を呼び出した!!
煉獄の炎がルイたちに迫る!!
「あれはまずぅぅぅぅい!!具体的に言えばレベル４０でも耐えられないかも!!」
「ルイさん!僕に残ったもやしを下さい!!
さっきもやしを食べながら思いついた防御魔法で持ちこたえます!!」
「思いつき!?」「ほらっ!もやしだよ!!」「モシャモシャ!!ゴックン!!」
「無駄だ!」「この魔法は過去に帝国軍を滅ぼした最強の奥義!!」
「たった一人の小娘に何ができるというのか!!」「「死ねぇぃ!!」」

「リレミト」
シェーラたちはダンジョンを脱出した!!

ルイたちはレベルスターを手に入れた!!
ルイたちのレベルが上がった!!
「・・・・・・・・なぁ?」
「私の師匠の残した言葉にこうあります
『当たらなければどうという事はない』」
「・・・よく考えたら戦うメリット何てないんだしいいか」
「何故かレベルも上がってるしね
所でさっきもやしを食べる意味あったのかい?」
「あ、小腹が空いたのでちょっと貰いました」
「空気読めとは言わないからもう少し自重して欲しかった・・・」
「それにしてもお腹空きましたねぇ、丁度脱出出来た事だし
お昼ご飯でも食べに行きませんか?」

「おっ良いねぇ、付き合うよ」「俺この辺りの事知らないからお任せして良いか？」
こうして色々ありながらも絆を深めた三人であった

「・・・・・・みんな遅いなぁ・・・」
その頃勇者と王様は謁見の間で待ちぼうけていた

「いい感じに終わろうかと思ったけど驚きの短さだったから
もうちょっとだけ続くんじゃよ」モグモグ
「計画性の無い作者・・・そう、アイツこそが私たちの最大の敵なんだよ!!」モグモグ
「基本的に何も考えずに作ってますからねぇ
作者は重度の貯金食いつぶし型の人間なんですよ」モグモグ
「所でこれなんて食べ物なんだ？」
「これはマッシロ王国の名物『ぷっちん○りん』ですよ」
「ぷっちん○りんってモグモグ言わせて食べるものじゃないだろ・・・」

ゴックン

「さてと、お昼ご飯も食べ終わったしいい加減城へ戻ろうか」
「またあのメイド集団と戦うんですか～？」
「ああ言うイベントに関係なさそうな敵は
　もう少しレベルを上げてから再戦する方がいいって」
「勇者・・・って言えば分かるか？」
「「あっ」」

　その後、ルイ、アスラ、シェーラの方向音痴三人によるマッシロ城攻略が始まった!!
「ルイさん危ない!!」「ドッブハァ!?」ドゴシャァ!!
「危なかったね！危うくモンスターの魔法で睡眠状態にされる所だったよ？」
「この辺りモロパクリじゃないか!!?」

「いらっしゃい、ここは厨房だよっ!!」
「あ、もやし余ってたら分けてくれませんか？
　非常食って無いと落ち着かないんだよねぇ～」
「冒険者故の職業病ですね」「（もやしって非常食だっけ・・・？）」

「がおーっ!!ここから先はこの俺ミノタウロス様の住処だ!!」
「RPGっぽい魔物だ!!」「牛肉ですね!!」「レベルスターは落としそうにないけどね」
ルイたちはミノタウロスを倒した!! 牛肉を手に入れた!!

「くっ・・・お腹が・・・
ごめんなさいルイ、アスラ・・・私はもうダメみたいです」
「小腹が空いたくらいで諦めるな!!」
「仕方ない、さっき貰ってたもやしまた頂戴しますね!?」モグモグ ポロポロ
「あっ」「「「見つけたぞ城を汚す不届きもの共め!!」」」
「仕事早いなアンタら!?」
「食事の邪魔を奴は馬に蹴られて死ね!!」

シェーラは思いついた魔法を唱えた!!「『ウマラギオン』!!」
空から屋根を突き破って無数の馬が降り注ぐ!!
「「「「「「「「ひひーん!!」」」」」」」」
「「「ぬわーっ!?」」」

メイドファイブは吹き飛ばされた!!

「・・・・・・予想以上の威力に驚きを隠せない」

「(俺も魔物で出来るかなぁ・・・)」

「見ろ!三つに分かれた迷路だ!!」

「定番だね、ここはバラバラに行ってみるかい?」

「いえ、ここはダンジョンどんな敵が出てくるか分かりません」

「ここは城だろ、まぁそれは置いといても俺たちが同じ場所に集合出来る気がしない

全員で一つの道ずつ調べていくのがセオリーだな」

ルイは落ちていた宝箱を開いた　ガチャッ

「ふはははは!!俺は仕事を辞めたぞぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」

「な、何ですかこのおっさん!?

と言うかどうやってこんな小さい箱の中に・・・」

「最近ヨガにハマっていてな」「限度があるだろ!?」

「ヨガフレイム!!」アスラは宝箱をおっさんに叩きつけた!!「ぎゃあっ!?」
おっさんの顔は宝箱に嵌ってしまった!!
「ヨガパンチ!!」シェーラはおっさんの腹を力いっぱい殴った!!
「ヨガヒップアタック!!」ルイはおっさんにヒップアタックを食らわせた!!
「ヨガキャメルクラッチ!!」アスラはおっさんの首を絞めながら逆海老反りさせた!!
ゴキャッ!!ベシィッ!!メキメキメキ!!
「ヨガアルゼンチンバックブリッカー!!」グギィッ!!
アスラはおっさんの背骨を叩きおった!!
ルイたちはおっさんを倒した!!
４０Ｇを手に入れた!!　おっさんから退職金を奪った!!
レベルスターを獲得!!ルイたちのレベルが上がった!!
「ただの強盗じゃねぇか!?」「片棒担いでおいて何を・・・」

「行き止まりですね」
「困ったなぁ、これが最後の道なんだけど」
「あっちなみにもう一つの道には『ただのしかばね』が落ちてあっただけだよ」
「城内にそんなもん転がってる時点で充分『ただの』じゃないですけどね」

「ティーン!!わちき閃いた!!」
「いきなり一人称をわちきに変えてどうしたんですかルイさん?」
「道がないなら作ればいいじゃない」「・・・その発想はなかった!!」

「うーん、中々来ないのぅ」
「寝坊でもしたんでしょうか?」
「いや、恐らく我が城の複雑さに迷って居るのじゃろう
何せ我が国は平和すぎるから城の増改築以外に金を使う機会が無かったからのぅ
城内の複雑さなら魔王城にも負ける気がせんわい」
「えぇー・・・もっと学校を建てるとか使い道あるじゃないですか・・・」
「正直に言うと、ふんぞり返った他国の王が我が城で迷子になるのを見たいだけじゃ」
「(何てひねくれた王様だ・・・)」
「さーて、恐らく今は城内でも中間地点辺りじゃろ
まだ6時間以上かかる筈じゃしゆっくり『ぷっちん○りん』でも食べながら待つとしよう」
「この世界にもぷりんあったんですね　ゴゴゴゴ・・・　　ん?」

ドゴォォォォォォォォォォォォォォォン
!!!!!!!!

「この世に悪がある限り・・・」
「ぷりんが食べれると聞いて飛んできました」
「いてて・・・行き成り飛び出すもんだから何か踏んじゃったよ・・・
ん?王様じゃないか、そんな所で何してるんだい?」
「お主たちに吹き飛ばされたんじゃ!!早く退かぬか!!」
「黙れヒゲジジィ、てめぇのお陰でレベルが3つも上がっちまったじゃねぇか!!」
「普通それはお礼を言う事じゃないんですか
まぁ僕も骨の一本くらい折らせて貰いますけど」「ひぃっ!?」
「まぁまぁ・・・爺さんは城の一部を破壊された、私たちは城で迷惑を被った
これで五分五分で良いじゃないか」
「わし王様なんじゃけd「「黙れ」」」ごめんなさい!!」

「あ、あぁ・・・・・・あぁ・・・・・・」「ほら勇者も突然の出来事に茫然自失してるじゃないか」

「ちっ、しゃあねぇな
早く勇者連れて旅立つぞ」
「これ以上物語に勇者が関わらないのは色々と不味いですもんね！」
「じゃあ帰りは宜しくねシェーラ」「はーい、リレミト！」
ルイたちはダンジョンから脱出した!!
かくして、勇者と転生者、二人の仲間たちの冒険が始まったのであった

いざ、新大陸へ

「どうも、突如王国からパーティーに拉致られた
『異世界からの勇者』ことリョウ・シノザキです
趣味はアマチュア無線、好きな言葉は温故知新です」
「『七つの顔を持つ女』こと、ルイ・サイファーだ
趣味は冒険、好きな言葉は変幻自在だ」
「『情熱と青春の象徴』ことアスラ・ミッドガルズだよ
趣味は料理、好きな言葉は一期一会だね」
「『美食の奉仕者』ことシェーラ・アフガレドです
趣味は食事、好きな言葉は焼肉定食です」

「で、旅に出るのは良いが行き先は聞いてるのか？」

「いや全然、王様にも魔王城どころか
　魔界にどうやって行くのかさえ分かんないんだってさ」
「けっ使えないヒゲジジィだ」
「少しは老人を労りな、それなら世界中を旅しながら
　魔界の伝承やら行き方の情報を探らなきゃいけないね」
「それなら俺の目的も果たせるしな」
「ＹＡＨ〇〇！知恵袋で聞いちゃダメなんですか？」
「「色々と崩壊するからそれは最後の手段にしよう」」

「さて、買い物も済んだことだしさっさと行こう」
「旅か・・・魔物と戦うって緊張するなぁ～・・・」
「あー・・・うん、ソウダネー」「戦えるといいですね♪」
「魔物は魔素しか食べる必要ないから
　その片の魔素の篭った草を食べてりゃ生きていけるんだよ」
「えーっと・・・つまり？」

「「こっちから向かわない限り魔物との戦闘はない」」

「一気に危機感が薄れてしまった」
「でも野党この大陸以外では野盗なんかも出没するらしいですし
ある程度の緊張感は持っておいた方が良いですよ?」
「野盗かぁ・・・もう少し異世界っぽい敵が欲しいなぁ」
「魔王が居るじゃないか」「ラスボスまで対人戦だけ!?」
「むっ対人戦を甘く見るなよ?
お前と比べればわかるが、この世界の人間は異常にタフネスで
年間に大陸中で多くても3人しか死者が出ないんだ」
「まるでこっちが魔物じゃないか!?」「今更気づいたんですか?」
「はいはい、メタな話だけどもうこれ5話目だよ?
旅立ちまで何時までかけるつもりさ」
「そうだよっ!俺なんかかれこれ2話分も待ちぼうけくらったんだよ!?」
「むっ・・・じゃあこの話はおいおいするとしよう」
「じゃあ、世界に夢と希望を与えるたびへレッツゴー!!」

「「ルーラ」」

ルイとシェーラはルーラを唱えた!!

ザザーン　ニャーニャー　ザザーン
「こんにちは!ここは船着場だよっ!」
「ちょっと待って!?」
「どうした、忘れ物でもしたのか?」
「違う!!効率的には違わないけど!!
　俺たち今フィールドに出ようとしてなかったっけ!?」
「ふっ馬鹿め!既にこの大陸は至る所まで冒険済み!
　故に歩いて冒険する必要なんてない!!」
「レベル上げもレベルスターを落とす人って余りいませんからねぇ」
「2週目くらいになったらゆっくり一人旅でもすれば良いさ
　今回はあんた以外この大陸は知り尽くしてるから諦めな」
「冒険初めて一日でこれ程の理不尽を味わうハメになるとは・・・」

ザザーン　ボーーーー

「まだ見ぬ世界へヨーソロー！」
「所でヨーソローってどう言う意味なんでしょうか？」
「私の見解では『ヨーソロー』→『ユウ　ソロ』
　ソロは音楽用語で『独奏』、つまり『ＨＥＹボッチ！』って意味じゃないかと」
「そんな意味であってたまるか!!」

「・・・・・・・・・・・・・」「ん、どうしたんですか勇者さん？」
「新大陸への冒険・・・ルイさんは召喚士・・・この海・・・荒れるぞ・・・!!」
「何を根拠にそんな事を」
「そう言えば掲示板で見ましたけどルイさんって拳闘士じゃなくて召喚士なんですね」
「お前だって武道家じゃなくて魔法少女だろうが
　一応召喚魔法も使えるけど闇魔法が便利すぎるのが悪い」
「闇魔法・・・ああ、あの『スタンド』みたいな奴ですか」
「確かにオラオラとか言ったけど敢えて言おう『それ違う』」
「で、勇者はどうしてルイが召喚士だと海が荒れると思うんだい？」

「えふぇふⅣを知らないなんて嘆かわしい!!
　海に出て新天地へ向かう瞬間！突然の幼女の離脱は定番でしょう!!
　おのれリヴァイアサン!!貴様だけは絶対に許さん!!」
「序でに補足すると烈海王とチキン、ローザ姫も離脱するな」
「リヴァイアサン、確か海の王様ですね
　そんなとんでもない魔物が現れるわけないじゃないですか」

　ザッパーン!!「幼女の召喚士と聞いてすっ飛んできました!!」

「このロリコンどもめ!!」
「俺１６歳なんだけど・・・」「合法ロリって奴ですね」「ぶっ飛ばすぞてめー!!」
「はいはい、多分負けイベントだろうけど張り切って行こうねー」
「初戦闘が負けイベントとかヤダこの世界」
「あー、かったりーまぁ幻獣界もそれはそれで面白そうだし良いか」
「私泳げないんですけどねー・・・」
「えっ何でそんなにやる気ないの？」
「「「うるせぇさっさと始めねぇと三枚におろすぞ!!」」」「ごめんなさいっ!!!」

シェーラの攻撃!!「今のうちに装備を外しておきますか」ゴソゴソ
シェーラは溺れないように装備を外した
アスラの攻撃!!「はいはい、攻撃攻撃」ペチン
リヴァイアサンに物理属性ダメージ!!リヴァイアサンはダメージを受けなかった!!
ルイの攻撃!!「幻獣界ってどんな所なんだろうなぁ～」
ルイは妄想に耽っている!!
リョウの攻撃!!「びっくりするほどやる気ゼロ!!?」
リョウはツッコミを入れた!!しかし効果はなかった!!

「うおりゃぁーくらえ!!すっごい津波!!」
リヴァイアサンはすっごい津波を起こした!!
全員に１０００のダメージ!!　全滅した!!

「うぁーーー!!」「津波だー!!全員何かに掴まれ!!」
「よーしみんな、また会おう」ピョン!!　ルイは海に飛び込んだ!!
「やれやれ、じゃっ縁が有ればまた会えるさ!」ピョン!!　アスラは海に飛び込んだ!!

「次に会う時までには洗脳されておきますね！」ピョン!!　シェーラは海に飛び込んだ!!

「言った本人が言うのもなんだけど、みんな順応早すぎじゃないか？

はぁ・・・次の仲間はガキ二人かぁ・・・」ザッパァーン!!　リョウは流されていった!!

かくして、勇者一行は旅立って1時間も立たない間に壊滅を喫したのだった――

流されてダイダイ村

「前回のあらすじ、リヴァイアサンに襲われて俺たち一行は全滅
その後、船は津波で流されてみんな別行動になりました」ザパァ
「前回のあらすじ、新大陸へ旅だった私たちは航海中
リヴァイアサンなる魔物に襲われ全滅、その後離れ離れとなった
パーティー編成直後に離散、これを不幸と言わずに何と言うかね?」ザパァ
「前回までのあらすじ、僕たち勇者一行は航海中に津波で離れ離れになりました
さぁ、僕の活躍はこれからだ!早く敵の国へ行って洗脳されてこないと」ザパァ
「前回までのあらすじ、ロリコンに流された
無駄に満天の星空なのがムカつく」ザパァ
「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」 ザザーン ニャーニャー

「（何でみんな居るんだ!?）」
「（まぁ普通に考えれば全員同じ方向に流されたんだからこうなるよね・・・）」
「（所でルイさん、幻獣界へ攫われたんじゃなかったんですか？）」
「（入国審査の所で
『えー、１６さーい!?きもーい!!幻獣界に入れるのは小学生までだよねー!!』
って言われた）」
「（当たり前のように心の中で会話しないでください二人共）」
「はぁ、ともかく壊滅だけは避けれたんだ
見た所ここも別の大陸であることに変わりはなさそうだし
私たちの最初の冒険の地はここで良いじゃないか」
「ルーラで帰れますけどね!!」「それ以上いけない」
「丁度あっちの方に明かりが見える、行ってみよう」

「いらっしゃい！ここはダイダイの村だよ！」
「代々野村？変わった人たちですね」
「『だいだい』の漢字は『ちぇん』と一緒だよ」
「あの読み方が基本だと思っていた作者は大恥をかきましたけどね！」

「何故自ら黒歴史をバラす・・・ダイダイの村か
　世界地図を信じる限り此処はヨツイロ大陸のマッチャ公国だな」
「ヨツイロ大陸か・・・随分遠くに来たわけでもないね」
「思ったより近くと言わないあたり
　遠くに来た方が物語的な盛り上がりがあると思ってるんだ」
「そんな事よりお腹がすきました、晩御飯にしましょう」
「そうだな、リョウ王様から軍資金みたいなの貰ってないか?」
「５０Ｇとひのきのぼうしか貰ってないぜ☆」
「ルーラ」　ルイとシェーラはルーラを唱えた!!

「むっ！何ｙ「マヌーサ（物理）」ギャァァァァ!!　目が!!目がぁぁぁぁ!!」
「はいはい、ちょっと通りますよ」シェーラはパイプ椅子を取り出して殴った!!
「うらわばっ」ドグシャァ
「な、なんじゃ貴様ら!!勇者殿と旅に出たんじゃ無かったのか!?」
「うるせぇー!!世界を救う俺たちへの軍資金が５０Ｇってどういう了見だてめーっ!!」
「そうですよ!!５０Ｇなんてせいぜいうまい某が５本しか買えないじゃないですか!!」
「仕方ないじゃろう!!この城の維持費だけで我が国はすっからかんなんじゃ!!」

「ならば貴様の命で払ってもらおう!!殺るぞシェーラ!!」
「食べ物の恨みは恐ろしいんですよ!!」

メメタァ

「１００００００Ｇ拾ってきた」
「嘘だっ!!」「ど、どうしたんですか勇者さん!?急に『声優』まで替えて・・・」
「ごめん、少しネタに疾（オーバードライヴ）走しただけだよ」
「それよりも１０万Ｇって・・・よくあのいかにもケチそうな王様がくれたね・・・」
「貰ったんじゃない、拾ってきたんだ」「正確には金庫の中に落ちていました」
「・・・・・ま、言いや　早くご飯食べに行こうよ」「勇者も大分順応してきたね・・・」

「マスター、オススメを一つくれ」
「あっ私はこの大盛りカレーでお願いします」
「私はチャーシュー麺とバーボンを一つ」
「俺は生姜焼き定食でお願い」

「ウィ、ムッシュ」
「全く統一感の無い店だな」
「『おにぎり』しか出ないよりかなりマシじゃないですか」
「寧ろそれは定食屋と言えるのだろうか？」
「作者は昔おにぎり専門店なるものを見た事があるそうだよ？
　文字通り『見ただけ』だけど」

「チャーシュー麺とバーボンです」「随分早いね」
「生姜焼き定食です」「次は俺か」
「大盛りカレーライスです」「わーい」バクン！「「一口!!?」」
「本日のオススメです」「・・・寿司？」「ネタはイカみたいだね」
「イグザクトリイ、本日のオススメは『いかのおすし』です」
「流石に一貫じゃ腹が膨れないな」
「当店では寿司を『ひと皿』でなく『一船』で出す決まりとなっております
　これはホンの繋ぎですよ」
「イカオンリーの舟盛り・・・シュールな光景だな」
「さぁ、外で船長がお待ちです」「船に積んだのか!?」

「わーい」バクン！「一口で４分の１減った・・・だと？」

「清々しい朝だねぇ・・・」
「もうイカは見たくない・・・」
「ぐへへ・・・僕の胃袋は１０８式まであるぞ」
「一人部屋で孤独な一夜を過ごしました」
「お前は俺ら三人と一緒に寝るつもりだったのか？」「そんな事実は一切無根です」

「で、ＲＰＧ的には村長を訪ねて見るものだけど行く？」
「流石にこんなのでもその位のテンプレは残ってるだろうし行くか」
「「既に嫌な予感が・・・」」

「おぉ、ではあなたがマッシロ王のブログに載っていた勇者様一行なのですね？」
「（ブログ・・・？）はい、それで合ってます」

「魔界への行き方の情報やら伝承があれば聞きたいんだが、お願いできるかい？」
「ふむ、そういう事ならここから東へ向かった所に
賢者を夢見るものが訪れるという知識の洞窟があります」
「賢者ですか、私の目標でもありますね？」「えっバトルマスターの間違いでしょ？」
「余計なことを言う勇者さんはメメタァしますよ？」「ごめんなさい」
「はいはい、口を挟まない
話の流れからするにその洞窟へ行けば何か手がかりがあるんだね？」
「はい、洞窟を封印している鍵は私が持っております」
「なら少しの間貸してくれないか？」
「いえいえ、勇者様一行と言えどこの鍵は世界に一つの貴重なもの
おいそれと渡すわけには行きませぬ」
「むっそれもそうだ、なら出来る範囲で頼み事ｗ「欲しければワシから奪ってみるが良いッ!!」」

村長が現れた!!

「「「ジジィ無茶すんな!!?」」」
「ふぉっふぉっふぉっ、知らないのですか？
　ＲＰＧで序盤に出てくる老人キャラは大概強いものですぞ!!」
「そうか、なら全身全霊で『殺し』にかかろう!!」
「剥ぎ取りなら任せてください!!!」「またこの剣を血で染める事になるとはね・・・」
「みんな思考が極端すぎるぜっ!!!!!」

数時間後☆

「　」チーン　勇者リョウのしかばね
「ぐふぅっ!?・・・少しは老人を労らんか!!?」
「　」チーン「　」チーン　アスラならびシェーラのしかばね
「仲間を瞬殺、俺にチート能力を全開で使わせるような奴に手加減できるか!!」
　ルイは影を巨大化して村長を殴った!!村長に物理属性のダメージ!!
「ごっはぁ!?これ程の強敵・・・あのメイド以来３０年ぶりじゃのぅ・・・!!破アッ!!!!!」

村長は両手から光線を放った!!
ルイに物理属性のダメージ!!
「うぉぉぉぉおおおおおお!!!!!」ガガガガガガ!!!!!
ルイは影を盾にして光線を防いだ!!
「なんじゃとっ!?まさかワシの究極奥義『村長ブラスト』を防ぐとは・・・」
「これでも!!くらぇぇぇぇぇぇえええええええいっ!!!!!」ゾゾゾゾゾゾゾゾッ!!!!!
ルイは盾にしていた影を幾つもの杭状にして飛ばした!!
村長に物理属性のダメージ!!村長を『はりつけ』にした!!
「ぐぁぁぁぁあああ!!ま、まいった!!ワシの負けじゃぁっ!!」
村長の降伏宣言!!「止めだぁ!!」しかし効果はなかった!!
「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラァァァァァァ!!!!!オラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオげぇっほげっほ!!うっく・・・!オラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァァァァァァ!!!!!」
ルイは影の両腕で怒涛のラッシュを叩き込んだ!!
村長に物理属性の大ダメージ!!　村長を倒した!!

５００Ｇを入手!!村長から洞窟の鍵を奪い取った!!
レベルスターを獲得!!ルイたちはレベルが上がった!!
戦闘の衝撃で村長宅が崩壊した!!　天井が崩壊!!
全員に１０００のダメージ!!　ルイたちは全滅した!!

続きます―

クイズ☆知識の洞窟

前回のあらすじ　ＶＳ村長

「村長を倒した俺らは洞窟の鍵を奪い取り
　知識の洞窟なる場所へたどり着いた」
「ちなみに道中には何も無かったからカットしたよ」
「途中盗賊なんかも出ましたけど、一方的にボコボコにしてはぎ取りました」
「世界を救う勇者一行としてはぎ取りはどうかと思うんだけど・・・」
「良かったじゃないか、『山賊の斧』を装備して
　お前も晴れてひのきのぼう卒業だ」
「盗賊が持っていたのに『山賊の斧』とはこれいかに」
「盗賊が山賊から奪ったんじゃないですか？」

『ここは知識の洞窟、知恵と発想を試す場所』
「知恵と発想・・・？」
「つまりクイズや謎解きがあるって事だね」
「となれば魔法少女で理系な私の出番ですね!!」
「（体育会系の間違いだろ）」「メメタァ」「テレパシー!?」
「別に一人でとく必要なんか無いんだから協力すれば良いだろ」
「むっ、それは違いますよルイさん!!
　ＲＰＧの主人公は仲間を何人連れていようと謎解きの時だけは孤独なんです!!」
「そんなの効率悪すぎるだろ」
「ＲＰＧに効率を求めるなんて・・・!!あなたはそれでも人間ですかッ!!?」
「効率を求めるだけで非人間扱いされるＲＰＧって一体・・・」
「シェーラ、お前はもう少し大人になるんだ・・・
　考えてみろ、この小説でこれまでにＲＰＧらしい展開あったか？」
「それはそうですが!!「認めるんだ!?」こんな横暴を認めてしまったら
　世界数多に点在する孤独な主人公たちがバカみたいじゃないですかッ!!」
「あぁバカ野郎さ、だが!!俺たちはその偉大な馬鹿野郎たちの失敗のお陰で
　成長出来るっ!!仲間たちと協力して謎を解いて何が悪いっ!!」

「っ!!あなたとはここで決着を付けなければいけないようですね・・・」
「仲間と協力することに反対されるＲＰＧ」
「謎を解くときはね、誰にも邪魔されず
　なんというか救われてなきゃあダメなんだ　独人で静かで豊かで・・・」
「ッッッ!!?まとめ役のアスラさんがボケ始めたら誰が収集付けるんですか!!?」
「お前らが討論を続ければ続けるほど、私の影が薄くなっていくんだ
　さっさと両方謝ってイベントすすめろ、さもなくば私はまとめ役を辞めるぞ」
「そう・・・ですね、すみませんルイさん
　私の勝手な理屈で一人で解くことを強要してしまって・・・」
「別に構わんさ、さぁそろそろ『何時まで続くんだこの茶番』って
　怒られるからイベントを進めよう」

　知識の洞窟　その1
「うわっ何だここ？　道が岩で塞がれてるじゃねぇか」
「入ってそうそう詰むなんてありえません
　あの看板にヒントが書いてあると思います」

『邪魔な岩をどかして道を作れ』
「ポ〇モンだコレー!!?」
「知恵と・・・発想・・・？」「腕力の間違いだろ」「肩が凝りそうだね」

「はっ!!　違いますよみなさん!!
　この看板には『どかして』と書いてあります『転がして』じゃありません!!」
「成程・・・つまり使える秘伝マシンは『かいりき』じゃなくて『いわくだき』なのか!!」
「その発想はおかしい!!
　大体あんなでっかい岩をどうやって砕くんですか？」
「ああ、勇者は知らなかったね、私たちが謁見の間にたどり着いた方法」
「チェーンジゲッター!!ゲッタードリル!!」
　ルイは影をドリル状にして右腕に巻いた!!　ギャルギャルギャルギャルッ!!
「キャーイクサーン!!?」「さぁ!!景気よくブチ抜いておしまい!!」
「俺を!!俺たちを誰だと思ってやがるぅぅぅぅぅぅうううう!!!!!!」
　ドガァン!!
　ルイはドリルで壁をぶち抜いた!!ドリルの回転でルイは前へ飛んでいった!!

ドガガガガガガガガガガガッッ!!!!!
壁Aは倒れた!!壁Bは倒れた!!!!!!壁Cは倒れた!!壁Dは倒れた!!
0Gを手に入れた!!　残骸を手に入れた!!

「目が回る～・・・」フラフラ
「ルイさんの貴重なクール顔崩壊シーン」
「カメラを持ってこなかったのが悔やまれますっ!!」
「今更だけど『いわくだき』と言うより『ドリルライナー』じゃないかい?」
「俺エメラルドで止まってるから分かんね」

知識の洞窟　その2

「ん?さっきとは打って変わってこじんまりした部屋だな・・・」
「あそこに看板と箱がありますね」
『1～9の異なる数字が1枚につき1つずつ書かれた9枚のカードがある。
この中からA～Cの3人が何枚かずつ取り、そのカードに書かれた数字の和について
次のア～ウの事がわかっているとき、A～Cの3人が取らずに残った1枚のカードに

書かれた数字として正しいのは何か。
ア　Aは3枚取った。
イ　Bは3枚取り、その3数の和はAの3数の和の3倍より2大きかった。
ウ　Cは2枚取り、その2数の和はAの3の倍数の和の2倍より3大きかった。
＊答えは其処のフリップに書いて下さい、一人につき一回だけです』
「せーのっ」
「「「こんな真面目な問題求めてねーんだよ!!!!!」」」
「はぁはぁ・・・じゃあ冷静になって考えるんだぞ」
「うーん・・・騎士の私には難しすぎる問題だね」
「もういっそここの扉もぶっ壊しませんか?」
「作者もコピペ使わずに頑張って書いたんだから考えようよ」
「うーん・・・チラッ　あぁ成程、答えは4だな」
「今カンペ見ただろ!!?」「そんな事実はありません」
「じゃあどう言う理屈で4なのか言ってみなよ」
「A～Cの3人のカードに書かれた数字の合計をそれぞれa～cとして

条件イ、ウより
b＝3a＋2
c＝2a＋3
残った1枚のカードの数字をxとすると9枚全部の合計より（以下中略
—よってa≧7の時①を満たすxは存在しないから
残った1枚に書かれた数字は『4』だ」

「あの一瞬で全部暗記しただとっ!?」「そんなに信用ないか？」
「ちなみに全部書かなかったのは文字数が半端ない事になるからです」
「こんなのコピペでも出来るから文字数稼ぎだと思われたくないんだとさ」

『ピンポーン』
「あれ？まだフリップに書いてないよ？」
「監視カメラでも仕込んであるのか？」
「そう言えばフリップに魔法の痕跡はありませんし
これに書かれたものを見るには直接見るしか無いんですよね」

「・・・何処からともなく洞窟へ入った俺たちを監視する謎の人物・・・
今度こそファンタジーの予感!!!!」
「エクスクラメーションマーク5つも付けるほど感極まるなんて・・・
余程飢えてるんですね!!」
「誤解される言い方しないで下さい」
「勇者が飢えてるのはともかく扉が開いたんだ
監視している奴の顔を拝むためにも早く進むよ?」
「あ、長くなるんで次回に続きます」
「(しまらないな〜・・・)」

勇者一行の前に立ちはだかる数々の難関
彼らは力を合わせ、謎を解くことができるのか?
つづきます

クイズ☆知識の洞窟？

「前回までの」「あらすじ」
「ドリルは男のロマンですねっ」「えっ俺のセリフは・・・？」
知識の洞窟　その３
ヒュオォォォオオオ・・・
「びっくりするほど氷点下」
「あの空調から冷気が出てるみたいだね」
「ここくらいはファンタジー要素を入れて欲しかった」
「空調を床一面氷張りになるまで入れてる時点で
これの製作者の頭が状態異常『ファンタジー』ですよ」
「看板・・・見ないでも大体わかるけど一応見ておくか」
『この迷路の床は大変滑りやすく出来ている
所々に置いてある岩を駆使してゴールまで辿り着け』
「その①よろしく所々に岩が配置されてるね」
「浮遊魔法とかで行けないものなのかい？」

「どれどれ」
　ルイは自分の影に飛び乗った、しかし影は直ぐに戻ってしまった
「(影が戻った・・・?)どうやらダメらしい
　今回は大人しく滑っていこう」

　ガンッ!!　ガンッ!!　ゴンッ!!　ゴシャァッ!!
「なにこれ超痛い」「止まるたびに壁やら岩に激突するからＨＰがガリガリ削られていくよ」
「そうだ、いい事考えた」「私もです、ルイさんからどうぞ」
「アスラが盾を構えた状態で先頭に並び変えれば被害を最小限に抑えられる筈だ」
「成程、名案だね」「シェーラさんは?」
「私は床じゃなくて上から垂れてる氷柱を掴んでぶら下がったほうが早いと思いました」
「どうして召喚士と魔法少女で此処まで思考が違うんだろう・・・?」
「召喚士・・・?そうだ、騎士の私からも一つ案があるんだけど」
　一旦氷部屋の外に出て知識の洞窟その２
「出てよ俊敏なる店主・・・『ガーゴイル』!!」

ルイの前に魔法陣が現れ、その中からトル〇コと少年ヤン〇スのトラウマが姿を現した

「いらっしゃいルイさん!!今日も良いものありますよ!!」パタパタ

「飛べる魔物とは言ったけどまさか『店主』を仲間にしていたとはねぇ・・・」

「昔持っていたアイテムが『ワープの罠』で飛ばされた時にひと悶着あってな

無茶苦茶言うもんで店番全員ボコボコにしたら仲間になった」

「そんな・・・ある意味どのダンジョンのボスよりも恐ろしいと言われた

店主軍団を返り討ちにするなんて・・・私とルイさんの実力はそこまで離れて居たんですね・・・」

「あれ以来我ら店主族はルイさんに頭が上がらないんですよ

あっでも勿論泥棒したら襲いかかりますよ?」

「金に困ってるわけでもないし、正当な買い物なら金を払うさ

で、今回呼び出したのは何時もの宅配じゃないんだ」

「はぁ、戦闘は勘弁してくださいね?

私たちはあくまで傭兵ではなく店主ですから」

「レベル９９の人間を容易く屠る方々が何ほざいてるんですか?」

「はい黙っててシェーラさん、この先の迷路で貴方たちの力を借りたいんです」

「「「「「「「おっきゃくさまのっ!!ためならっ!!えんやこら～っ!!」」」」」」」」バッサバッサ
「傍から見ると相当シュールな光景ですね」
「傍から見ないでも店主二匹に捕まって空を飛んでる光景はシュール以外の何者でもないと思う」
「召喚獣が呼び出してすぐ消えなくて助かったよ」
「そうだな（だってこれ『仲間を呼ぶ』だし）」

知識の洞窟　その3クリア

「ぜぇぜぇ・・・じゃあ我々はここで休んでいるのでお帰りの際は声をかけて下さいね」
「リレミトは使わないのかい?」
「あー、えっと誠に言いづらいのですがアレ戦闘中以外は使えないんですよ」
「寧ろ戦闘中に使うことのほうが稀なのに・・・」「一回戦闘中に使えたお陰で助かったから文句は言えん」

知識の洞窟　その4

『問題、次の問に答えよ「答えは√3だ」』ピンポーン　ガチャッ
「「えぇ・・・」」「真面目な問題なんて誰も望んでません」

知識の洞窟　その5

「扉が3つに分かれてるな」

「この内どれか一つが正解とかそんな感じでしょうか？」

「間違えたら真っ逆さまとか？」

「間違えなきゃいい話だよ、なになに？」

『　掲示板

ダンジョンで3つの扉を選ぶとき

1名無しさん

一番右の扉が次のルートへ行ける

2名無しさん

→嘘乙、マジレスするとこういう時は真ん中が一番安全

3店主

クラピカ理論は正しかった、左に行くと乙る

4名無しさん

お前らバカ杉ワロタｗｗｗこんなの全部の扉開けて試せばいいじゃんｗｗｗ

5名無しさん

→お前だけは許さない絶対にだ

この掲示板をヒントに扉を選べ』

「読解パズルって奴か、こういう場合は『ここから先は嘘つきしかいない』とか『一人だけ嘘つきがいる』とか『一人だけ本当の事を言っている』ってパターンなんだが」

「そういった事は書いてませんね、しかも全員の意見を参考にすると矛盾が生じます」

「私も>> 4と同じこと考えたけど>> 5を見る限り駄目だったみたいだね」

「一人だけ店主がいることに誰も突っ込まない不思議

と言うか見た感じ2ちゃんねるなんだから

全部が全部信用できる訳じゃなくない?」

「確かに、2ちゃんねるで得た情報って名無しが多いから好き放題書き込めるんだよな」

「じゃあ唯一コテハンのある店主のコメントが一番合ってる確率高いね」

「と言うかさっき店主に運んでもらったんだから聞けばいいじゃないですか」

「えっ、あぁ確かに昔来たことがあります

そういや書き込んだなぁ～あの扉、実は全部正解なんですよ」パタパタ

「掲示板の意味は一体なんだったのか」「恐らく入ってきた人間を怖がらせる為、だろう

ね」

「岩を押したり滑る床をぶつかりながら滑ったり、挙げ句の果てには考えすぎが命取りな罠・・・

二つ目以外完全に強靭な肉体と勇気を試す洞窟だな

本当に此処って知恵と発想を試す洞窟なのか？」「私も自信なくなってきました」

知識の洞窟？　その５

「看板以外何もないな」「ぼちぼち開発経費が無くなってきたんでしょうか？」

「どれどれ、あれ？セロテープで下にメモが貼ってある・・・」

『この魔物を打ち倒せ』

『歯の治療に行ってきます　ｂｙエス○ーク

ｐｓ　俺様がいない間、此処の鍵は開けっ放しにしてあります』

「・・・ボスは綺麗な歯が命だからねぇ」

「せっかくのファンタジーが・・・」
「エス○ークとかレベル４～５の私たちに無茶言わないで下さい」
「寧ろ歯の治療が無かったらそれこそダイダイ村の村長の出番だったな」
「あの人そんな強いの!!?」

知識の洞窟?　その６

『これが最後の問題です
この問題を解いた時、あなたは賢者となる資格を得ます

さて、これ何問目?』
「・・・・・・・・６だな」『ピンポーン』
「何でしょう最後の最後でこのガッカリ感」
「こんなので賢者になったらマッハでダーマ神殿に駆け込む自信ある」

「そもそも俺勇者だから転職出来ないんだけど」

ピカーーーー・・・!!　突如看板が輝きだした!!

「うわっ!?　なんだこれっ!!」

おれの　めのまえが　まっしろになった

続きます